

# ATSUME

7

NO. 1

創刊号

但馬むしの会

1944

ATSUME

NO. 1

是呀

食の了生魚

---

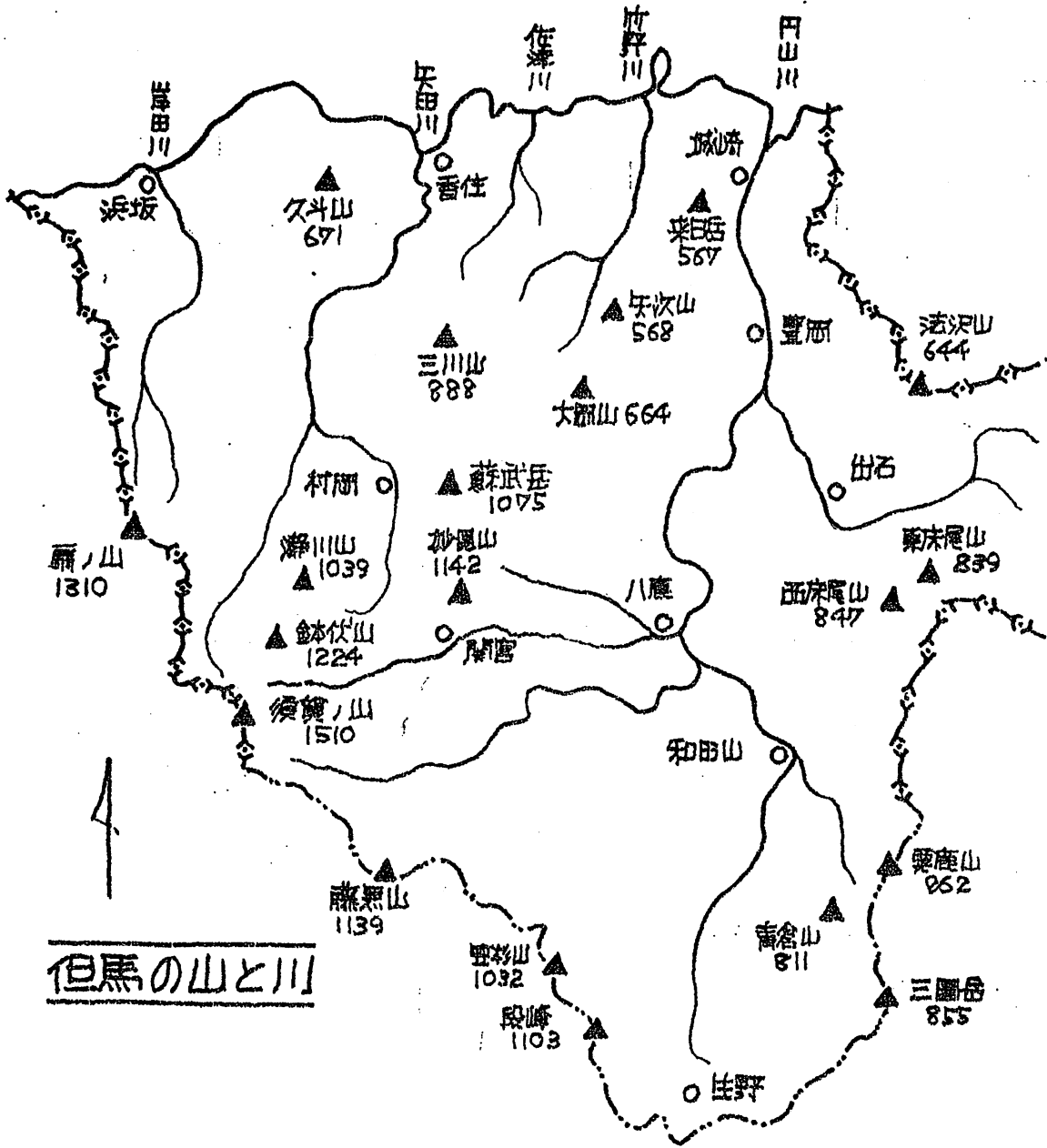
---

## 目 次

IRATSUME 創刊にあたって	2
「但馬むしの会」成立の経緯と今後の展望 (谷角素彦 + 遠藤知二)	3
「但馬むしの会」発足に寄せて (高橋 匡)	7
我々の課題 (石田達也)	12
むしの会発足にあたって (足立義弘)	14
むしの会発足にあたって最近思ふこと (木下賢司)	16
采日岳の蝶類 (木下賢司)	21
執筆者の住所	34
編集後記	34

---

---



IRATSUME 創刊にあたって

但馬むしの会発足を記して会誌IRATSUME 第1号を御送りします。IRATSUME は豊岡市周辺の低山地に分布する可憐なシジミチョウ、ウラクロシジミの属名で、「郎女(いづめ)」の意です。御愛読下さい。

# 「但馬むしの会」成立の

## 経緯と今後の展望

谷角素彦・遠藤知二

### 成立の経緯

この会を構成する若いメンバーの多くは、かつて豊岡高校生物部員であった者である。筆者のひとりが豊高2年生だったある日の放課後、但馬文教府のある妙楽寺でネットを振っていたとき、同じようにネット片手に蝶を採集している人と出会った。それが木下さんであった。この出会いが、この会設立の大きな契機になっているように思われる。

木下さんの長年の貴重な標本データを前にして、またその他にも蝶をやっている人のことを耳にはさんだりしていたこともあって、何とかこ水りのデータをひとつのまとまったものにするにはできないだろうか、こ水りの共通の趣味を持った人たちと交流できる場があれば、どんなに素晴らしいだろうかということ、「会」が憲法の中に浮かび上がったのである。こういうことは以前からも感じており、何人かの生物部員の間では話したこともあったが、現実味を増すものとなったのは、この頃からである。

しかし、会設立のための具体的な動きは遅々としてはかどらなかつた。その原因としては、まずメンバーとなるべき各人が日本各地に分散しており、そのうえ各人の仕事なり学校なりに縛られて、なかなかメンバーが一同に会して実のある相談ができなかつたことである。が、もっとも大きくわかれわかれにのしかつたのは、それよりも会の性質、形態、趣旨をどのようなものにするかという問題であった。対象を「蝶」だけにしぼる、「昆虫」にする、「生物」にまで広げる、それぞれに批判があつた。また、自然保護との係りをどうするか、などなど。

複数人間かひとつの共通の会をつくってやっていこ

ラとするのであるから、そこには問題が生じ、困難がつきまとうのは当然のことである。会の運営は、方向づけを以て軌道にのせるまでがひとつの大きな難関だ。現在のメンバーは、蝶をはじめとして昆虫中心であるから、当面は但馬の昆虫相を明らかにしていくことを活動の重点として、まず会誌を出そうということになった。この創刊号の出版により、やっと第一歩を踏んだところである。見切り発車であつたかも知れないが、活動の確かな足掛かりが出来たように思う。今後、そこからさらに一歩一歩より内容の深いものに、また活動の枠を拡げる柔軟性をもって進展させていかねばならないであらう。

### 今後の展望

さて、このような経緯を踏まえて、ようやく会誌の出版にまでこぎつけた但馬むしの会ではあるが、出発の当初から多くの問題を抱え、まだまだ暗黒線の状態である。しかし、ひとりひとりの抱負や展望がなければならぬ問題は解決され得ないだろうし、またこの積極的な姿勢のみが問題を進展させ得るといってよいだろう。具体的には今後どのような立場から、どのように発展させていくかを、発端から会の設立にかかわってきた者のひとりとして述べてみたい。

《地方性に根ざすこと》 「むしの会」、「昆虫愛好会」といった同好会組織は、全国にそれこそ数多くあるだろう。その意味からいえば、われわれの会も「またむしの会!」ということでは終わってしまいかねない。けれども、それぞれ地域にはそれぞれ昆虫相があるように、それぞれ地域にそれぞれ同好会があることは決して意味のないことではない。海外とまでいわずとも、はるばると遠征して採集旅行を繰り返さず、その成果を誇る同好会の風潮は今なお一方ではよく見受けるが、それはおそろしく皮相を知見しかもたらさない。ある地域の昆虫相を調べるのは非常に時間と労力を要することだが、それが最も可能なのは、なんといってもその地域に住む人間である。身近なフィールドを選び、そこで地道な研究を

檔案に類を重ねることの方がはるかに重要であり、貴重で  
 なく、徹底して地方性に根ざしてこそ、地方の昆虫同  
 好会組織の存在意義は高まるものと思う。

### 《自然保護とのかかわり》

徹底して地方性に根ざすこと、それはまた地域そのもの  
 のを、虫を愛し自然を愛するものを目で見直すことにも  
 つながろう。筆者のひとり、現在六甲山麓の一角、西  
 宮に住んでいるが、かつて昆虫の宝庫といわれた六甲は  
 今やその面影を偲ぶべくもなく、山上には車と人とゴミ  
 の山ばかりである。それに比べれば但馬には自然がまだ  
 豊かに残っているとはいえるものの、鉢伏などでは既に六  
 甲に近い姿となってしまうている。

それではわたわたはどらすれば良いのか。わたわたの  
 行なう採集は、一方ではその虫の生息地が非常に限定さ  
 れていたり、個体数が少ないようなばあ、与える影響  
 も小さくないだろう。その限りにおいては採集は充分に  
 考慮されなければならぬし、濫獲は厳に慎まねばなら  
 ぬ。しかし、また一方では「虫屋」や自然を愛する者  
 ほど、自然の変化に敏感な人種はいないと思う。あの川  
 べりにいたトンボが護岸工事のために姿を消してしまっ  
 たとか、ここの山にはこんなむしがいたのに伐採が違ん  
 で随分減ってしまったとか、こういうことをわたわたが  
 言わないで誰が言えるだろう。

幸いにしても但馬には兵庫県自然保護協会の支部がある。  
 この支部とも手を組んで、自然破壊の脅威と対抗するた  
 めに、今のうちには但馬の生物相をできるだけ明らかにす  
 るべく努力を続けることは、わたわたのひとりの使命と  
 いってよいだろう。そのためには「虫屋」といえるのも  
 むしろだけを見るのではなく、広い視野をもつことが要求  
 されるだろうし、またわたわたの立場からの発言権を獲  
 得していかねばならぬのではないだろうか。

### 《会のあり方について》

今述べたように、自然を守る一助として自然が失われ  
 る前に但馬の昆虫相を明らかにすることが、まずもつ  
 てわたわたの最大の課題である。とはいえ、全昆虫相の  
 解明などという不可能事であるし、設備もなければ資

料もない中で——だからこそやりがいはある！——われわれはできる限りのことを着実にやっけていくしかない。但馬のむしについての知識をひとつでも増やすことこそ、われわれの目的としてさしつかえのないだろう。それとともに、むしとのつき合い、生きもののとのつき合いを通して自然への理解を深めていくことも、それぞれの個人にとって大切なことだろう。それほいろいろなつき合い方があるに違いないし、理解の仕方もさまざまだろう。野山を歩き回るだけでいいという方法もあるだろう。じっくり腰を落着けて何事かを探ってやろうという方法もあるだろう。いろいろな方法が考えられてよい。その中で自分なりのテーマが発見されようし、自然のより深い理解も可能となろう。そうして、それらのテーマについての研究や考えが、この会誌に発表されてはじめてこの「IRATSUME」も生きてくる。「IRATSUME」を媒体に、会員相互の自由で独創的な研究や意見の交換がなされることを期待してやまない。

《おわりに》

さてしかし、地方性を重視せよとはいうものの、筆者ら他が既に地元を離れてしまっているという状況は、大きな制約となる。今後は、同好者が現われるのを待ち、また積極的に呼びかけていって、但馬在住の会員を増やすように加りたい。

さらに「むしの会」として出発したけれども、ゆくゆくはむしに限らず、他の動物でも、植物でも、生きものの自然に興味ある人には広く開かれた会にしていきたいと考えている。

そのためにも、まずはわれわれ自身が実力をつけていかねばならない。その点、身近には緑豊かな自然が控えている。これを活かすことは、いわゆる地方に住む人間の特権でもある。この特権だけは、いくらでも行使して構わないのだから。

(たにかど もとひこ / えんどら ともし・学生)  
 (前半を谷角が、後半を遠藤がそれぞれ主に執筆した)



# 「但馬むしの会」発足 に寄せて

高橋 匡

「但馬むしの会」が豊高生物部OBの遠藤知二君（北海道大学）や石田達也君（鳥取大学）等のほん走によって昨夏誕生し、今春会誌を創刊されるに臨んで、所愿の一端を述べて会の発展を祈念する。

但馬は中国山脈の東端に位置し、赤ノ山、鉢伏山、瀬川山、扇ノ山など1000m級の山が深い溪谷をフくり、変化に富んだ自然環境をフくり出している。いっぽう本州東北部から中部にかけて連なる背梁山脈は京都比良山系の線で切れて、丹波高原となり、兵庫県においては900m以下の比較的低い山塊を隔てて瀬戸内の自然と裏日本山陰の自然とが、ほとんど繋っているという特殊性をもっている。従って植物相も多彩で分布の面限または東限とされる種も少なくない。北端は日本海に面し、この水に向かって丹山川、竹野川、佐津川、矢田川、岸田川などの河川が流れ、その流域に集落が形成されている。平地が少なく、山々に妨げられて交通が不便で、めぼしい産業もない但馬は兵庫県の僻地とされ、若い人達は都会にあこがれて流出し、過疎化の著しい地域であった。

しかし、都会の環境悪化が益々深刻化し、脱都会の傾向がしだいに強まり、観光ブームの影響や自然食品への指向などによって但馬を訪れる都会人の数が漸増し、但馬は観光主導型の開発時代を迎えた。それに伴って観光道路の建設、ゴルフ場その他の観光施設の建設、山林、耕地の宅地転用が急速に進められた。長い間、「陸の孤島」とよばれてきた村々に立派な舗装道路が通じ、家々は民宿に変わった。確かに但馬の人々の現金収入は増し、生活水準も都市のそれに一歩近づいたようにみえる。だが、その代償として但馬はかけがえのない貴重なものを

失ってしまっただのではなからうか。

昭和28～29年頃、鉢伏高原の春は眼のさめるような若草が萌えていた。アズキコロガシから地蔵堂を経て氷ノ山越えに至る山道の初夏は生い茂る広葉樹の若葉の隙間からもれる陽光が敷きつめた落葉を明るく照らし、飛びかう昆虫の翅音もにぎやかに、目前にそば立つ氷ノ山の北面はブナの原生林で埋められていた。昭和32年頃、真妙見はまさに深山幽谷の趣きを呈し、トチの大木が谷を埋めていたし、三川山はブナの原生林におおわれ、一部伐採がはじめられたばかりであった。駒ノ山は戦時中疎開の人達が拓いた畑ヶ平開拓村に井田さん一家が残っていてワサビ作りをしていた。周囲はブナの巨木にかこまれ、各種の鳥がさえずっていた。当時、浜坂から畑ヶ平に達するには殆ど一日がかりであった。

今は、大幹線林道が村岡から瀧川山、鉢伏山を経て氷ノ山の中腹を大段平めかけて延びつつあり、駒ノ山畑ヶ平は黒取県若桜へ抜ける幹線林道の沿線であり、妙見林道は金山峠を経て蘇武岳から三川山へ、そして香住方面へ通じようとしている。そのほか、大屋町の横行林道、小代溪谷から黒取へ抜ける林道、春采峠に通ずる新園道、兎和野野外センターに向かう道路、大岡山ゴルフ場に通ずる道路、但馬の山や谷は道路で埋めつくされるばかりである。山や谷ばかりではない。日和山から竹野に通ずる第一但馬海岸有料道路、切浜から佐津に通ずる第二但馬海岸有料道路をはじめ、但馬海岸のほとんど全域にわたって海岸道路が伸びている。これらの道路工事によって破壊された自然は計り知れない。道路工事ばかりではない。紙パルプ資源の不足に伴うブナの需要増大と、木材価格の騰貴によるスキ、ヒノキ林の拡大、高冷地野菜の生産拡大に伴う森林の耕地化、スキー場やゴルフ場の増設などによって自然林は急激に伐採された。20年たらずの間には但馬の山々は殆ど伐りつくされ、昔ながらの原生林と称し得るものは、ごく限られた地域の、ごく限られた面積に、まるで本園のよりに孤立してとり残されているに過ぎない。果してこれらの原生林がいつまで生き残れるものか。極めて疑問である。

がってアカマツ林の伐採によつて営業地を奪われたコ  
 ウトリは絶滅の危機に追いやられ、生きのびる  
 ための食物も得られなくなり、追退きわまつて危険な人  
 類にあらわれ、害と決めた。「イヌワシの1羽や2羽と人間  
 権利があるのだから大事だ」と思っているか。」と聞き直る人  
 の生活の中で果たして独善的なエゴはないのであろうか。  
 こころまで生きて虫屋のは程まで自然が破壊される前  
 念に記録をとれ、環境の变化によつて、今となつては洗  
 ったるべきでない。私に記録をとれ、環境の变化によつて、  
 うと残念でならないのである。

私が但馬の昆虫相について関心をもち始めたのは昭和  
 29年頃であるが、当時はまだ但馬の昆虫相についての文  
 献や報告はあまりなかつたのではないかと思ふ。高橋寿  
 郎氏が文献にあげられている昭和12年、『昆虫界』とい  
 う雑誌に発表された北村運明氏の「兵庫県出石郡神美村で  
 採集した蝶とコガネムシ」などは最も古いものと考えら  
 れるが、北村氏が但馬の人なのかどうか、何種ほどの  
 記録があるかも知れない。昭和28年、『兵庫生物』Ⅱ・3  
 に岩田久二雄（膜翅目）、奥谷禎一（膜翅目）、永富昭  
 （鱗翅目）、中根猛彦（鞘翅目）各氏の「水ノ山の昆虫  
 」と題する報告があるが、これは前年おこなわれた兵庫  
 県生物学会採集会の結果をまとめたものであつて、  
 私が知っている最も古い記録である。昭和29年には『兵  
 庫生物』Ⅱ・4〜5に奥谷禎一氏の「但馬縣ノ山の昆虫」  
 が報告されたが、これも生物学会採集会の記録であつて、  
 8月18日と季節のおそいせいから種、カミキリ5  
 種、ハバチ5種とトワダオオカの記録がある。同じ号に  
 高橋寿郎氏の「兵庫県産産産虫類について（第一報）」が  
 り、生野、塚村、大久保村、福定などが採集地として記  
 録されている。『兵庫生物』Ⅲ・1〜2（1955）には山本  
 兼次氏の「水ノ山の蝶類について（第一報）」、山本広一

氏の「但馬水ノ山夏の蝶」、吉阪道雄氏の「水ノ山の蝶類」としていに水ノ山の昆虫相に関する報告がふえてくる。扇ノ山の昆虫相についてのまとまった報告としては昭和35年に発行された兵庫繁文（現在は神戸大学）の『生物研究部誌』創刊号が最も古いものだろう。主として植物、蝶類、甲虫類についてのまとめである。続いて2号、3号と辻啓介氏を中心とする生物研究部の扇ノ山の昆虫相についての報告がなされている。桓原高校生物研究会は昭和29～33年の5年間、水ノ山の昆虫相調査を続け、会誌『NATURA』16号に「水ノ山特集号」を報告、ついで34年から扇ノ山昆虫相調査をおこない、逐次会誌に報告している。こうして昭和30年代にはいつてから但馬の昆虫相に関する報告は競々とふえてきたが、その殆どが地元以外の研究者によるものであって、調査地域も水ノ山、扇ノ山に集中していた。

その中で、当時大屋町面谷小学校教諭であった中尾淳三氏が水ノ山および杉ヶ沢、若杉峠を中心に生徒とともに採集された蝶類の目録を昭和34年、桓原高校生物研究会誌『NATURA』16号に発表され、当時関宮中学校教諭であった面村登氏が昭和36年『兵庫生物』に八木川水系の水棲昆虫について記録されている。そのほかにも但馬の人で但馬の昆虫相について研究された人もあるかも知れないが、そうした報告を見たことがない。

私は桓原高校生物研究会の採集会や兵庫県生物学会の採集会に参加して水ノ山、妙見山、扇ノ山などの昆虫をみつめながら、何とか但馬人の手で、但馬の昆虫相をしっかりと正確につかみ、記録することが必要だと考えるようになった。一部の高い山ばかりでなく、低い山も海岸も平地も河川も住居地域も、すべてにわたって調査してみなければ本当の昆虫相はつかめない。そして、それは但馬に生まれ但馬に育ち、但馬に住む者でなければできない仕事だと悟った。幸い昭和38年4月、出石高校に転任になったので、さっそく出石郡の標本を採りかかった。生物部と私の採集だけでは能率が及がらないので1年生の夏休み課題として昆虫標本を課して協力してもらった。その結果は「出石郡昆虫目録」第1報および第

之報として報告した。昭 042年かり豊岡高校に勤務す  
 うになつて生物部の諸！とともにも豊岡周辺はもとよ  
 山、大岡山、金山時 蘇武岳、三川山、妙見山、本  
 山、氷ノ山、扇ノ山と 集を繰リ返し、相当数の本  
 もあつたので、この 人であつた標本箱30箱(甲虫類)  
 たいと考へ、私の個人的にあつた標本箱30箱(甲虫類)  
 および関係文献資料等、すべて研究室に運んで整理にと  
 りかかっていた昭和47年10月4日、学校火災により一夜  
 にして灰じんに帰してしまつたのである。  
 その後、学校再建の種畜と生物部諸君の若いエネルギー  
 一に支えられて、もう一度資料のつくり直しをしよう  
 決心し、今日まで努力を続けている。生物研究室には新  
 しい標本箱が60箱用意され、すでに半数以上が標本で埋  
 まつていゝ。「豊岡高等学校昆虫標本目録」は今回第4  
 報を報告する運びとなり、記録した種は1,500を越えた  
 しけれど、但馬昆虫相の全容を明らかにするには、まだま  
 だ程遠い。しかも、日一日と昆虫の住みかは破壊されつ  
 つあるのである。

現在、但馬に住む人、特に中・高生の中に昆虫に興味  
 をもち、実際に採集活動をやつていゝ人も少なくなつて  
 思ふ。毎年8月、但馬文教府で「植物・動物・岩石同定  
 会」が開かれるが、時々すばらしい昆虫標本をもちて採  
 集かされることがある。だいで以前のことであるが、  
 系井中の生徒が立派な標本をもちてきた。驚いたこと  
 には、その中にキバハリハムシの標本が1頭あつた。この種  
 虫は外來種でハムシ科中世界最大の、室石のやうに美しい  
 甲虫であり、はじめ六甲山系のみで見られ、その後氷  
 上郡で発見され、播州でも1~2カ所みつかるといふ。分  
 布が広がつていゝのである。その標本は少年が特に大事に  
 していらつたもので、無理由に壊れてしまつたが、採集地は  
 井となつた。その後何年かたつた。新田に開墾町のある高  
 うもキバハリハムシを多数(確か、10)を採集した。高  
 者がまた、数年前文教府に採集地(現在浜坂高)の磯

野島弘君もすばらしい甲虫の標本をもってきた。彼は洪水時の荒木上から、あるいは海浜の砂地から特異な種を採つておられる。しかし、これらの貴重な資料が単なるコレクションに終わり、まどまた記録として公表されなければ、世のモチ腐れ以外の何ものでもない。また、報告も固定の正確さがなければ資料としての価値はなく、かえって混乱を招くばかりである。

この度「但馬むしの会」が発足し、同好の士が互いに連繋を深めながら協力して郷土但馬の昆虫についての知見を積上げようとする事は誠に喜ばしいことである。そしてその具体的な礎石としてこの会誌が創刊されることを心から祝福するとともに、会の発展にともなつて会誌が充実に単なる同好誌ではなく公式の研究発表誌としての実力をもったものに育てあげてほしいと願うものである。「継続は力なり」これは柏原高校にいた頃、大先輩松山確郎先生から教えられたことばである。いったん出版した以上、石にしがみついて継続する執念があれば必ず実力はついてくるものなのである。

(たかはし ただす・豊高教諭)

\*

\*

\*

## 我々の課題

### 石田達也

但馬の生物はまだまだわかっていない。そう思う。まったく何がでてくるか、本当に訳のわからないところだ。ぼくは現在、鳥を主に観ているので、鳥の話になるが、豊岡市六ツ(ろっほろ)田園\*が今のところ西日本で唯一のガン(マガン)の繁殖地になっていたり、標高わずか1,300メートルの山頂付近に、ふつう信州など

\*丹山川を、市街地の東方に広がる田園地帯。

の高山帯でしか見られない鳥<sup>\*</sup>が——恐らく繁殖していると思われるが——いたり、木ノ山や扇ノ山がイヌワシの重要な繁殖地であったり....

しかし、こんなことは鳥に限られたことではない。高校生の頃スミレをやっていたが、ブナ林下などの山地帯に生えているナガハシスミレが城崎の温泉寺のあたり一標高わずか10メートル前後——にあつたり。扇ノ山には中部地方の亜高山帯に生える種<sup>\*\*</sup>が、ひどいところでは、ブナ林の林床をおおってしまうほど繁茂していたりして、まったくびっくりしてしまった。

平野が少なく、交通の便も悪いため、京阪神地方からそれほど離れていないのに一つの隔絶された地方となつて、自然の環境が極端な形で壊されずに割合残っているのだらう。

だが、そんな但馬にも様々な人工自然が作られつつある。ゴルフ場だとか、山地をつつまる観光道路——林道なんて、大ウソもいいたこだ——だとか、そういう人工自然の作られたところには、もう住むことのできる生物というのには限られてくる。但馬全体が、いつかは人工自然だらけになってしまうかも知れない。人間が生きて生活していく以上はいづかはそうなるだらう。それはまだずつと先のこともかも知れないし、あるいはすぐ明日のこともかも知れない。

但馬にはまだ「まだ」秘密がいっぱいある。こんなおもしろいところをほうっておく手はない。しかし、個人の手で調べられることといったり、たかが知れている。やはり、ある程度組織の力が必要だらう。今まで、バラバラにやっていたことを統合していけば、かなり空白は埋まるだらう。

ことは急ぎ進めるかも知れない。これまでに集めたデータが過去のデータとかなり異なるうちに何とかしなければ

\* コルリ、マミジロ、ハリオアマツバメなど。これらの鳥は夏鳥で中部以北へ渡る際に西日本を通過することかあるが、扇ノ山で繁殖しているかどうかはまだ確認されていない。

\*\* ツルタチツボスミレ（テリハタチツボスミレの変種）

なりないだらう。することは山ほどもある。個々の人がバラバラに集めたデータを一つにまとめ、その上で空白地帯を埋めていたり、新しい疑問をみつけてそれを調べたり、それこそ蝶に限ってみても、まだまだ分からないことの方が多いだらう。アサギマダラが海岸に群舞しているという。何故だらう？ギフチョウとカンアオイ類の分布とはどういう関係にあるのだらう？スギタニルリシジミの分布はどうか？トチノキとの関係は？杉ヶ沢の開發でゼフィルスたちはどうなるのだらうか？日本海側のウスバシロチョウは、何故太平洋側の個体より黒っぽいのだらう？モンシロチョウとスギタニルシロチョウとの関係はどうか？サトキマダラヒカゲとヤマキマダラヒカゲとの関係はどうか？氷ノ山や扇ノ山の山頂付近にはどんな蝶が生息しているのだらうか？

まだまだ研究テーマはいっぱいある。興味はつきないことだらう。

さあ、この但馬の自然を、但馬人の手で調べていこうではありませんか。

(いしだ たつや・学生)

＊

＊

＊

## むしの会発足 にあたって

### 足立義弘

今迄に何回か集まり、話し合、た結果、どうにか今年には当会を発足させることになりました。今後、会の活動をすすめるにあたって、今迄の経験と反省のもとに、自我介绍なりの考えと会に対する期待を記しておきます。

まず、会として行なっていく以上、ある程度の目的意識をもつてする必要があると考えます。いろいろな人が集まってくるために、それぞれの考え方のくいちがいがあから、会としてはまとまりのないものになる危険性が生じ



てくると思われ、ただ単に好きなもの同士の集まりであるなら、ここまではする必要はないし、各個人の目的等を満たすだけで足りるはずで、

今みながこれだけ積極的に会として行なっている以上、ある種の必然性を感じているからではないでしょうか。

今、我々の側面には、まだまだいたる所に自然が残さず、残っています。しかし、これらの中で各種各様な生物の環境がどこまで満たされているか、という様な事は、手だて的につかみきれないと思われ、我々として直しては——あくまで個人的な意見ですが——これらに調査して保護する立場から会を行なっていくべきだと考えます。この様な活動を自分達でやっていたい、また同時に我々がやらねば、という気持ちがあると思います。

今返一人で行なってきたものを集約すると同時に、今後会として行なっていく段階で、一人ではどうしても限界があることも常に連絡をとり合うことによつてのりかえていけると考えます。調査研究とそれに伴う情報交換と集約、これが軌道にのりだすには少し時間がかかるかも知れませんが、とにかくやってみたいと思います。なによりもまずフィールドへ出てみることです。

最後に、今返自分がやってきたなかで思ったのは、やはり自分で出かけて、見て確かめることが実に大事だということです。無計画であり、行き当たりばったりの状態でしたら、行って調べてみるということの重要性を、いうまでもないと思いますが、強調しておきます。

なお、今後の具体的な運営方法はみんなと話し合いたいと考えています。

(あだち よしひろ・電々公社勤務)

# 虫の会発足にあたって 最近思うこと

木下賢司

この度但馬にも虫の会が発足することになり、日ごろから虫を、とりわけ蝶を愛好してきた私にとっでは大変に嬉しいことだと思えます。これまで多くの累人である私などには、難しい本など理解できるわけもなく、かといって指導を受けたリ、話を交したりする相手なく、結局は空しく採集を繰り返すしかなかつたので、まさな待ちに待っていたという感じで、とても嬉しい出来事です。

でも、私を振り返ってみるとき、三十代も半ばに達し今年には小学校に入学しようかという子供を待ちながら、何故今さら虫だ蝶だと目の色を変えて騒ぎだて、またそのことについて少しも疑ってみなかったのかと、正直に言つて不思議な気がします。

そんな私のことを世間一般流に言つて、いい年をして片付けてしまふことは簡単なことでしょう。けれど、一度でも山野に出かけ、虫達を相手に思いきり白いネットを振り回してみたことのある人ならば、少しは私の気持ちも分かつてもらえるかも知れません(も、とも、今の大人の中でそんな経験の一度もない人なんているはずはありませんが...)。やうと桜の花がほころびはじめた春の日、まだ枯れ草の自立つ山路に、思いもかけずあの艶やかなギフチョウに巡り合った時の喜び.....あるいは、ううとらしい梅雨も降った清々しい夏の朝、かたずくの朝の日に輝かせて乱舞するゼフィルス達....そんなことを想像するだけで私の胸は高鳴るのです。そんな蝶達のことを、どうして少々年をとつたというだけの理由で簡単に忘れてしまふことができるでしょうか。

その蝶達と私が付き合いを持つようになつてから早く

も二十年近くにもなりました。もともと山好きなせいも手  
 伝って、蝶達を過ってあげないで、もともちこちと好きに回ったも  
 ので、私の青春時代の思い出の大部分が蝶好きで遊んで  
 いるように思われます。しかし、その大好きで遊んで  
 ことで、以前から思っていたのと違います。最近特に蝶の  
 数が減少してきて、さういふことでも、スミレや桜の花に戯  
 れ、ギョウジャニンジンや、巨大な葉の羽根を夏の太陽にひるがえし、楫  
 を高く低く飛ばして、さういふ蝶の減少、特に蝶の採  
 集は、どうも私にしてみても、悲しい事だと思ひます。少  
 数が減るに、その決定的な原因を究明して、でき  
 しか、こういふ現状、その立場に逆行するも  
 保護が盛んに叫ばれて、その間、まわりの人々も知れ  
 のだ、と、本心から、その色や蜜を採るに、蝶の味を、カ  
 見たり、を愛しむというよりは、虫を採るに、蝶の味を、カ  
 わり、を愛しむというよりは、虫を採るに、蝶の味を、カ  
 して、子供達に遊ばせたり、蝶を採るに、蝶の味を、カ  
 につけて遊ばせたり、蝶を採るに、蝶の味を、カ  
 と、立派な遊ばせたり、蝶を採るに、蝶の味を、カ  
 子供達に遊ばせたり、蝶を採るに、蝶の味を、カ  
 採った、自然が、蝶を採るに、蝶の味を、カ  
 まし、自然が、蝶を採るに、蝶の味を、カ  
 ます。だから、蝶を採るに、蝶の味を、カ





自然開発という美名のもとに、年々山々の木々は倒され、山は削りとられてその現状は目を被いたくなるほどです。害は虫の数の減少した最大の原因がそこにこそあることは、誰でも知っています。虫の数が減少した原因として採集を責めるならば、当然そのもっとも大きな原因は、無秩序な開発、無秩序な農の敷布、工場、自動車の排気による大気の大汚染等とそれ以上に責めなければなりません。そのことが、トンボやセミを自由に採り置かな自然の中に染れく過してきた今の私達大人がそんな害を憂しみすら奪われた子供達に対してできる、せめてもの罪滅ぼしだと思えます。そしてそれは、将来採集しよらにも虫が一匹もいないなんて悲しいことにならないための絶対に必要なことだと思えます。

置田の地方でも自然破壊の進行は例外ではないことを思うとき、この度の虫の会発足にあたって、このことをもう一度みんな考えてみる必要があると思えます。さあ、あつて、自然保護と採集の関係を念としてほかに考えていくのか、避けては通ることのできない大きな課題だと思ふのです。

(きのした けんじ・国鉄職員)

## お願い

編集局では、「但馬昆虫研究誌総目録」を企画しています。過去、但馬地方の昆虫相または生態研究、その他それに類するものについて発表された雑誌、記事等を御存知の方、お持ちの方は是非下記へ御連絡下さい。学会誌、学校生物部部誌、自刊のもの、どんなものでも結構です。郵便料金は当方が負担致します。お気軽に御連絡下さい。なお、「総目録」については並次この誌上で発表していく予定です。

◎連絡先

063 札幌市

遠藤知二 (TEL. 011-711- )

# 来日岳の蝶類

木下賢司

## I はじめに

来日岳の蝶は、既に「豊岡市周辺の蝶」(遠藤知二・谷角葉彦・中野真, 1975, 自然保護協会但馬支部研究紀要, vol.1 (1)) に34種が報告されているが、新たに来日岳で記録した25種を加え、改めて来日岳の蝶類としてここに報告する。もとより、この報告もその調査期間が短かい上に、調査の季節、範囲(コース)ともに偏り、とても十分なものとはいえないが、一応の中間報告とし、今後とも調査を続け補う、ていきたいと思う。

但馬の地区にもいよいよ虫の会が誕生しようとしている。全国各地の虫の会の活発な活動を風の便りに聞くと、どこなにか羨ましく思い、また但馬に長く住んでいながら、調査や報告を都会の人達のみ reliance しなければならないもどかしさを何時も味わってきた私には、その待ちに待った但馬の人達の虫の会の胎動が次第に高まりつつある現在、その嬉しさはとうとうい言葉などでいあらわせるものではない。

しかし、正直にいえば、私達の活動はまだほんの出発点に立ったところで、いわば小点をすぎない。その意味からすると、この目録もその未熟さを完全さからいって、まさに点にすぎないと思う。今後はいかにこのような点を増し、それを線とし、面としていくか、高い換ればいかにその輪を拡げて、研究の立ち後水た但馬の地の蝶相を把握していくかにあると思う。自然破壊の急激な進行がこの但馬でも例外では無い現象を考へると、もはやそれは急務でさえあると思う。そして、その資料が自然破壊への歯止めにも少しでも手掛かりとなることを信じてがんばりたい。

尚、この目録に資料を提供して下さい。豊岡高校生物

部の皆さん、植物のことで御指導下さった庵中政和先生、早川貞夫さん、また印刷に関して大変御世話になった遠藤知二さん、谷岡素彦さん、その他の方々には深く感謝いたします。

## II 地形、気候および植生の概要

栗日岳(566.7メートル)は、兵庫県北部のほぼ北端近くに位置し、東西を円山川と竹野川にはさまれて、山頂より北僅か5km足らずに日本海の荒波が打ち寄せている。

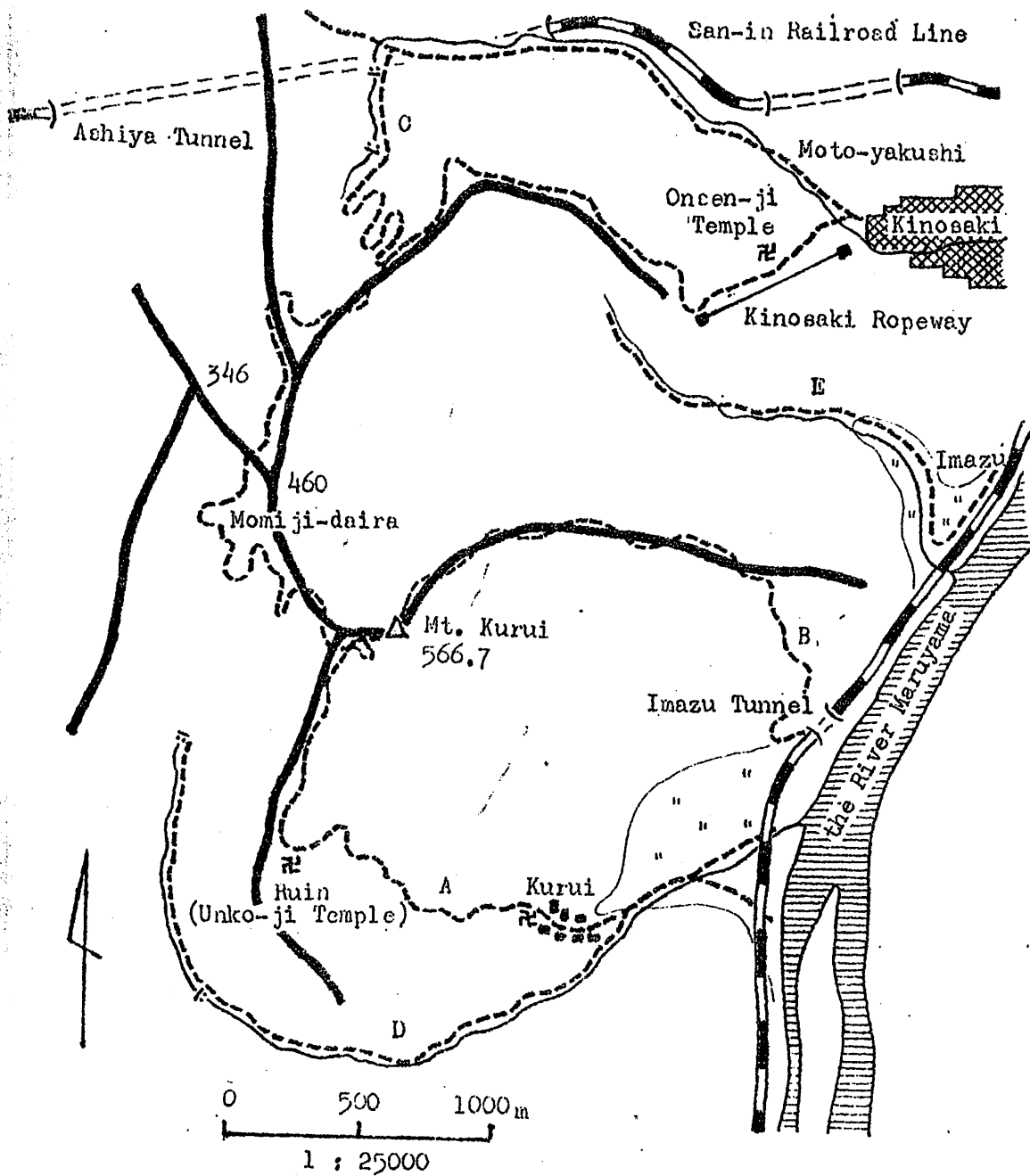
気候は、その位置から典型的な寒日本型の気候で、まともに季節風を受ける冬には山頂付近では2メートルにも及ぶ積雪がある。年間雨量はふもとの城崎町でも2600ミリを越えて、寒に神戸あたりの2倍に達するという。

地質はその案層を北但層群に被われていて、山容が急峻な割には地形は単純で、頂上よりほぼ南北にのびる尾根と東に急激に円山川まで落ち込む尾根からなり、谷は深く、栗日部落奥の谷と城崎より山陰線沿いにのびた谷が目立つ程度である。

その植生は、中腹までスギ、ヒノキの植林が達し、葎原らしきものはほとんど見られない。僅かに谷すじ、休耕田、伐採跡および中腹の寺跡付近のクリ林上部にススキ等の草原らしきものが見られるにすぎない。その他、中腹までは植林に混じって、僅かにコナラ、クリ、ホウノキ、エノキ等の混じった小さな林が見られる。また、中腹以上では、また植林の達んでいない場所がほとんどであるが、二次林的なクリ、クヌギ、コナラ等が多く、それにアカマツが加わり、シイ、シラカシは僅かに残されている程度である。山頂付近は、ほとんど人の手の入っていないところが多く、クマノミズキ、ミズナラ、ヤマボウシを主に、僅かにブナも見られる。

また、城崎町の温泉寺周辺は、かつての原植生がそのまま残されていて、シイの古木を中心にクス、サカキ、モチ、タブ、ツバキ、ユズリハ等が繁茂して、城崎の四所神社や豊岡市気比の絹巻神社付近と共に、日本海側としては非常に珍しいヒメハルゼミの棲息地であることがうなずける。





THE MAP OF STUDY AREA

### III 採集調査地域および調査回数

採集、調査は主として次の5つの地域(コース)によつて行なつた。

A: 来日より中腰寺跡を経て山頂に至るコース  
 5月(3回)、6月(2回)、7月(1回)、8月(2回)

B: 今津トンネルより山頂および山すそ付近  
5月(1回)、6月(1回)

C: 城崎よりマイクロウェーブ道を経て山頂および温泉寺付近  
4月(1回)、5月(3回)、6月(1回)、8月(1回)

D: 采日部落より谷の奥へ至るコース  
5月(1回)、6月(1回)、7月(1回)、8月(1回)

E: 今津から谷の奥へのコース  
7月(2回)

## IV 目録

上記5つのコースにより、現在までに採集し確認した種のみを掲げた。採集場所についてはなるべく詳しく書いたが、過去の記録のため確認できないものについては采日岳のみとした。

### I HESPERIIDAE セセリチョウ科

1. *Erynnis montenus* BREMER ミヤマセセリ  
1975-V-12 山頂付近 (Kenji KINOSHITA)  
全山を通じ、個体数は多く、山頂付近では5月末までみられる。
2. *Daimio tethys* MÉNÉTRIÈS ダイミョウセセリ  
1961-VI-6 采日岳 (K. K.)  
1975-V-12 今津トンネルの上 (K. K.)  
山すそから中腹にかけてみるが、少ない。
3. *Choaspes benjaminii* GUÉRIN-MÉNÉVILLE アオバセセリ  
1975-V-12 采日 (K. K.)  
山すそから中腹にかけて、春(5月)、夏(8月)ともみかけるが、数は少ない。
4. *Ochlodes ochracea* BREMER セメキマダラセセリ  
1975-V-12 采日 (K. K.)  
山すそから中腹までみられ、林縁の草地を活発に飛翔しているもののみみかけるが、少ない。
5. *Thoressa varia* MURRAY コチャバナセセリ  
1973-V-27 采日 (Tomoji ENDO)  
1975-V-15 城崎、元薬師興 (K. K.)  
山すそから中腹まで多く、特に夏道を上るの水、獣糞などに集まっているのを多くみる。
6. *Pelopidas jansonis* BUTLER. ミヤマチャバナセセリ  
1975-V-15 城崎、元薬師興 (K. K.)  
山すそ谷むいにみかけ、アザミの花茎に集まっているもののみみかける。あまり数は多くない。

7. *Parnara guttata* BREMER et GREY イチモンジセセリ

1975-VI-10 中腹寺跡付近 (K. K.)

各地に普通にみかけるこの種をあまりみなかったのは、調査の時期が春から夏に集中していたせいかもしれない。

森林の周辺や雑林などに生活する種が多いのは、采日岳にはあまり葦原らしいものが見られないうせいでと思われれるが、形も小型で飛翔も速い種が多く、見落としやすい可能性もあると思うので、今後の詳しい調査が必要だと思ふ。

## II PAPILIONIDAE アゲハチョウ科

1. *Parnassius glaciolis* BUTLER ウスバシロチョウ

1973-V-27 采日 (T. ENDO)

1974-V-26 中腹寺跡付近 (Makoto NAKANO &amp; Tatsuya TOMODA)

1975-VI-4 采日 (K. K.)

1976-V-28 采日 (K. K.)

1例を除いて、いずれの採集例も采日部露の奥の谷すじにみられたものであるが、採集したものの他に二、三頭みられただけで、非常に数が少ない。

2. *Luehdorfia japonica* LEECH ギフチョウ

1968-IV-21 采日岳 (Norihiko YOSHIDA)

1976-IV-17 もみじ平 (K. K.)

4月の調査はただの1回だけで不完全ではあるが、数は少なくない。今後、采日側での調査もしたい。

3. *Graphium sarpedon* LINNAEUS アオスジアゲハ

1976-VIII-4 采日、谷の奥 (K. K.)

全山を通じて極めて多く、特に上記採集の折には区路上に二、三十頭の若羊が吸水しているのを数ヶ所で観察した。

4. *Papilio machaon* LINNAEUS キアゲハ

1973-IX-15 采日岳 (M. NAKANO &amp; Yukuo KUKCHARA)

1975-V-12 山頂 (K. K.)

全山を通じてあまり数は多くはないが、山頂には虫道をついているものを多数みかける。

5. *Papilio xuthus* LINNAEUS アゲハ

1974-IX-29 采日岳 (M. NAKANO &amp; Koji HATA)

1975-V-28 山頂 (K. K.)

前種に比べて旧地に多く、畑などの花に集まるものを多くみる。山頂にも虫道をつくるものをみかける。

6. *Papilio helenus* LINNAEUS モンキアゲハ

1975-V-28 山頂 (K. K.)

1975-VIII-6 元薬師、谷の奥 (K. K.)

全山に少なくない。春はアサミ、夏にはクサギの花に集まるものや、吸水に集まるものを多くみかける。

7. *Papilio protenor* CRAMÉR クロアケハ

1975-VI-4 采田 (K. K.)

1975-VIII-6 元薬師, 谷の輿 (K. K.)

前種より少ないが、山すそ、中腹に普通にみかける。アサミの花等を訪れるもの、吸木(2いるもの)などをみる。

8. *Papilio blenor* CRAMÉR カラスアケハ

1975-V-12 今津トンネル上の尾根 (K. K.)

1975-VIII-6 元薬師, 谷の輿 (K. K.)

山すそから中腹にかけて多く、春型はアサミ、ウツジの花、夏型はクサキの花に集まるものをみかける。

9. *Papilio maackii* MÉNÉTRIÈS ミヤマカラスアケハ

1974-IX-29 采田岳 (M. NAKANO)

1975-V-12 山頂 (K. K.)

1976-VIII-20 もみじ平 (K. K.)

山すそから山頂まで普通にみられるが、山頂で県道をつくっているものが特に多い。

上記の他に、*Papilio macilentus* JANSON オオカアケハ (1975-V-12, 今津トンネル付近, 木下), (1975-V-27, 采田, 木下) の目撃記録があるので、この種も山すそを中心に少ないながら種奥するものと思われる。ウスバシロチョウの記録は全て采田側のものであるが、城崎側、竹野側等まだ発見の機会はあると思う。ギフチョウについては、城崎ロープウェイ上終点からもみじ平付近までやや多く見られるので、あたりの林の中にカンアオイ類の自生地があると思われる。

## III PIERIDAE シロチョウ科

1. *Eurema hecabe* LINNAEUS キチョウ

1974-IX-29 采田岳 (M. NAKANO)

1975-V-12 今津トンネル上 (K. K.)

1975-VI-10 采田 (K. K.)

山すそ、中腹ともに最も普通にみられる。

2. *Gonepteryx aspasia* MÉNÉTRIÈS スジホソヤマキチョウ

1974-IX-29 采田岳 (M. NAKANO)

1975-VI-15 元薬師, 谷の輿 (K. K.)

上記2例のみなので、少ないものと思われる。

3. *Colias erate* ESPER モンキチョウ

1975-V-14 中腹寺林付近 (K. K.)

山すそを中心に中腹までみかけるが、数は少ない。

4. *Anthocheris scolymus* BUTLER ヲアキチヨウ  
 1975-V-12 采日 (K. K.)  
 山すその畑などに現われ、ダイコンの花等に集まっているのをみかける。数はあまり多くない。
5. *Pieris rapae* LINNAEUS モンシロチヨウ  
 1975-V-12 今津トンネル付近 (K. K.)  
 1976-VI-1 采日 (K. K.)  
 山すその畑周辺に普通に見られる。
6. *Pieris melete* MÉNÉTRIÈS スジグロシロチヨウ  
 1974-IX-29 采日岳 (M. NAKANO)  
 1975-V-12 中膳寺跡付近 (K. K.)  
 山すそから中腹にかけて普通に見かけるが、前種より山地性が強い。

今までのところ、采日岳に限らず豊岡近辺では *Pieris napi* LINNAEUS エゾスジグロシロチヨウの報告はないが、可能性は十分にあり、今後の課題としたい。

## IV LYCAENIDAE シジミチヨウ科

1. *Artipoetes pryeri* MURRAY ウラゴマダラシジミ  
 1961-VI-6 中膳寺跡付近 (K. K.)  
 その後の調査はないので、非常に少ないものと思われる。
2. *Favonius orientaris* MURRAY オオミドリシジミ  
 1974-V-26 采日岳 (M. NAKANO)
3. *Rapala arata* BREMER トラフシジミ  
 1975-V-12 山頂 (K. K.)  
 山すそより山頂までみられ、少なくない。
4. *Callophrys ferrea* BUTLER コツバメ  
 1970-IV-19 采日岳 (Motohiko TANIKADO)  
 1975-V-12 山頂付近 (K. K.)  
 全山に普通に見られ、山頂付近では5月下旬までみられる。
5. *Lycæna phlaeas* LINNAEUS ベニシジミ  
 1975-V-27 采日 (K. K.)  
 山すそを中心に普通。
6. *Taraka hamada* DRUCE コイシシジミ  
 1974-V-26 采日岳 (M. NAKANO)  
 1976-V-29 采日、谷の駒 (K. K.)  
 山すそ中心に見られるが、場所が限定され、その数も多くない。
7. *Lampides boeticus* LINNAEUS ウラナミシジミ  
 1974-X-10 采日岳 (T. TOKODA, S. YASAKI & Y. MUKOHARA)  
 1975-VIII-12 元樂師谷峠登り口 (K. K.)  
 本種の土着地域は、病態半島以西の暖のない温暖な地域とされ、発生を繰り返しながら次第に北上する本種の、豊岡付近での従来の最も早い採集例は、1963-

VIII-25 神武山 (坂田 隆彦氏) であることや、翅がかなり変換していることから、VIII-12 の個体は南から移動してきたこの地方人の第一種と見られる。本種は、山すそを中心に エンドウ、アズキ 等の豆、クズ"など" マメ科植物の付近を飛び回るのを多くみかける。

8. *Pseudozizeeria maha* KOLLAR アマトシジミ  
 1975-VIII-12 栗田 (K. K.)  
 山すそには普通。
9. *Celastrina argiolus* LINNAEUS ルリシジミ  
 1975-VI-10 栗田 (K. K.)  
 1976-VI-1 今津トネル付近 (K. K.)  
 山すそから山頂付近まで"最も普通にみかける種で、一般に樹上と高く飛びかか  
 るは路上の湿地に集まるのを多くみる。
10. *Everes argiades* PALLAS ツバメシジミ  
 1975-V-27 栗田 (K. K.)  
 山すそおよび 中蔵寺跡付近で"みかけるが、あまり多くはない。

平地性ゼフィルス類としては、ウラゴマダラシジミ、オオミドリシジミの記録しかない。後者の数は少なくないと思われるが、上記1例の記録しかないので、今後の調査が待たれる。他の、クヌギ、コナラ、ミズナラ等のブナ科植物を食樹とする平地性ゼフィルス類、とくに、*Japonica lutea* HEWITSON アカシジミ、*Japonica saepestriata* HEWITSON ウラナミアカシジミ、*Antigius attilia* BREMER ミズイロオナガシジミ等の当然発見されてもよい種の記録がない。また、食樹を同じくする、*Favonius jezoensis* MATSUMURA エゾミドリシジミ、*Favonius cognatus* STAUDINGER ジョウザンミドリシジミ、*Chrysozephyrus aurorinus* OBERTHÜR アイノミドリシジミの発見の可能性は、当然だと思ふ。アカガシ、ウラジロガシ等を食する *Narathura japonica* MURRAY ムラサキシジミの発見も当然だし、トネリコの木もあるので *Ussuriensis stygiana* BUTLER ウラキンシジミや、城崎側にはトチもかなりあることから、*Celastrina sugitanii* MATSUMURA スギタニルリシジミ等の今後の発見が望みである。

V CURETIDAE ウラギンシジミ科

1. *Curetis acuta* MOORE ウラギンシジミ  
 1972-X-7 城崎ローアウェイ上終点付近 (K. K.)  
 1974-IX-29 栗田 (T. TOMODA, S. YASAKI & Y. MUKOHARA)  
 1976-VIII-4 栗田 (K. K.)  
 余山に普通。特に9月頃より夏物になる秋型は数が多く、路上の湿地に集まるものを多くみかける。

## VI DANAIDAE マダラチョウ科

1. *Parantica sita* KOLLAR アサギマダラ  
 1974-IX-29 采日岳 (T. TOMODA, S. YASAKI & Y. MUKOHARA)  
 確実な記録は上記の1例のみで、采日岳で発生したものかどうかはわからない。平地では珍しいが、竹野海岸道終付近での目撃の報告が数件あることから、その方面から飛んできたものか、食草であるキジョランの采日岳での分布ともあわせて今後の課題としたい。

## VII LIBYTHEIDAE テングチョウ科

1. *Libythea celtis* FUESSLY テングチョウ  
 1972-X-7 城崎町ロープウェイ上終点付近 (K. K.)  
 1975-V-28 元藪師、谷の奥 (K. K.)  
 全山に普通にみかけ、6月中旬には新鮮な個体がみられる。

## VIII NYMPHALIDAE タテハチョウ科

1. *Argyronome ruslana* MOTSCHULSKY オオウラギンシヨウモン  
 1976-VIII-4 采日、谷の奥 (K. K.)  
 上記の1例しか記録は少ないものと思われる。
2. *Argynnis paphia* LINNAEUS ミドリシヨウモン  
 1974-IX-29 采日岳 (T. TOMODA, S. YASAKI & Y. MUKOHARA)  
 1975-VI-19 もみじ平 (K. K.)  
 山すそ、中腹寺跡付近、マイクログレーブ 麓沿いのみかけるが、あまり多くない。
3. *Nephargynnis anadyomene* C. et R. FELDER クモカクタシヨウモン  
 1974-V-26 采日岳 (M. NAKANO)  
 1975-VI-10 中腹寺跡付近 (K. K.)  
 全山を遍じてみかけるが、数は少ない。
4. *Damora segana* DOUBLEDAY メスグロシヨウモン  
 1974-IX-29 采日岳 (T. TOMODA, S. YASAKI & Y. MUKOHARA)  
 今までのところ、上記の1例のみである。少ないものと思われる。
5. *Fabriciana adippe* LINNAEUS ウラギンシヨウモン  
 1961-VI-7 中腹寺跡付近 (K. K.)  
 採集例は上記1例のみであるが、山すそや中腹の草地には時々みかける。
6. *Argyreus hyperbius* LINNAEUS ツマグロシヨウモン  
 1973-IX-15 采日岳 (M. NAKANO)  
 1976-VIII-20 山頂 (K. K.)  
 本種は、采日岳に限らず、山頂に集まるコヒカが多く、夏から秋にかけて、山頂付近のみみかける。数は少ない。
7. *Limentis (Ladoga) camilla* LINNAEUS イチモンジチョウ  
 1975-VI-4 采日、谷の奥 (K. K.)  
 1976-VI-1 今津トンネル付近 (K. K.)  
 山すそ、中腹、ともに普通にみられ、糸緑葉上に着止するもの、路上に降りているもの、またウツキの花などに集まるものを多くみかける。

8. *Neptis sappho* PALLAS コミスジ  
 1974-IX-29 栗日岳 (M. NAKANO)  
 1975-V-12 中腹寺跡付近 (K. K.)  
 1975-VIII-12 栗日 (K. K.)  
 山すそから山頂まで最も普遍にみられる。
9. *Araschnia burejana* BREMER サカハチチョウ  
 1974-IX-29 栗日岳 (M. NAKANO)  
 1975-V-12 栗日 (K. K.)  
 山すそから中腹にかけてみられるが、数は少ない。
10. *Kaniska canace* LINNAEUS ルリタテハ  
 1968-IV- 栗日岳 (M. TANIKADO)  
 1975-VIII-6 元薬師、谷の奥 (K. K.)  
 山すそから中腹の雑木林付近でみられ、クヌギ、カシ等の樹液や獣糞に集まるもの、路上に静止するものを多くみかける。
11. *Polygonia c-aureum* LINNAEUS キタテハ  
 1976-VI-1 今津トンネル付近 (K. K.)  
 山すそや草地にみかけるが、あまり多くない。
12. *Nymphalis xanthomelas* DENIS et SCHIFFERMÜLLER ヒオドシ  
 1968-IV-21 栗日岳 (N. YOSHIDA)  
 1975-VI-19 もみじ平・山頂 (K. K.)  
 中腹の雑木林の樹液に集まっているもの、路上に静止しているものを多くみかける。山頂付近にも少なくない。
13. *Cynthia cardui* LINNAEUS ヒメアカタテハ  
 1963-IV-19 山頂 (K. K.)  
 上記の1例があるのみで、少ないものと思われる。上記個体は越冬したもの。
14. *Vanessa indica* HERBEST アカタテハ  
 1973-IX-15 栗日岳 (M. NAKANO)  
 1975-VI-19 もみじ平 (K. K.)  
 山すそから中腹に多くみかけ、花や樹液に集まり、路上に静止するものもみられる。
15. *Dichorragia nesimachus* BOISDUVAL スミナガシ  
 1974-V-28 栗日岳 (M. NAKANO)  
 1975-VI-4 栗日、谷の奥 (K. K.)  
 1975-VI-19 もみじ平 (K. K.)  
 山すそから中腹にかけて多く、木の葉上の静止するもの、樹液に集まるもの、路上に静止するものなど、多くみかける。
16. *Apatura ilia* DENIS et SCHIFFERMÜLLER コムラサキ  
 1976-VIII-4 栗日、谷の奥 (K. K.)  
 谷すそには食樹であるヤナギ類を多くみかけるが、採集例は上記1例のみ。
17. *Hestina japonica* C. et R. FELDER コマダラチョウ  
 1974-V-28 栗日岳 (M. NAKANO)  
 1976-VIII-4 栗日 (K. K.)  
 山すそを中心に多く、エノキの大木の回りを飛翔するものや、クヌギ等の樹液に集まるものをみかける。



栗田岳のタテハチョウ科の特徴は、草原が少ないせい  
が原因と好むヒョウモン類、例えばウラギンヒョウモン、  
ウラギンスジヒョウモン、オオウラギンスジヒョウモン  
等は非常に少なく、反面エノキを食するヒオドシチョウ、  
ヤマキマダラチョウ、サルトリイバラを食するルリタテハ等  
が多いことである。特に、アワアキ科の植物を食するス  
ミナガシは非常に多い。

この他に、標本はないが、Fabriciana nerippe C. et  
R. FELDER. オオウラギンヒョウモン (1969-VI-30 栗田岳、  
栗田町産) の記録があるので、*Sasakia charonda* HEWITSON オ  
ムラサキの発見とともに今後の課題としたい。

## IX SATYRIDAE シヤノメチョウ科

1. *Ypthima argus* BUTLER ヒメウラナミシヤノメ  
1973-V-27 采田岳 (T. ENDO)  
1975-V-28 もみじ平 (K. K.)  
1975-VIII-12 中藤寺跡付近 (K. K.)  
山頂から中腹まで普通にみられ、雑草の間を低く飛び、花に集まるものもみられる。
2. *Minois dryas* SCOPOLI シヤノメチョウ  
1974-IX-29 采田岳 (M. NAKANO)  
1975-VIII-12 山頂 (K. K.)  
ススキ等各種のイネ科雑草を食する本種は、草原の少ない采田岳では数は  
少ないと思われる。上記の個体の他に数頭を山頂付近でみかけただけだった。
3. *Neope nipponica* BUTLER ヤマキマダラヒカゲ  
1973-V-12 山頂 (K. K.)  
1976-V-20 中藤寺跡付近 (K. K.)  
いずれも中腹より上で採集したもので数は少なくないが、全てヤマキマダラ  
ヒカゲであって、サトキマダラヒカゲの種態は確認できなかった。今後調査  
したい。
4. *Harimo callipteris* BUTLER ヒメキマダラヒカゲ  
1974-IX-29 采田岳 (M. NAKANO)  
1975-V-28 山頂 (K. K.)  
中藤寺跡付近から山頂上までみられるが、あまり数は多くない。上記2例の採  
集日の差が大きいので、9月29日のものは第2位の個体かも知れないが、  
今後の調査を待たたい。
5. *Lethe diana* BUTLER クロヒカゲ  
1974-V-26 采田岳 (M. NAKANO)  
1975-V-27 采田 (K. K.)  
1975-V-28 もみじ平 (K. K.)  
中腹のタケ、ササ類のあるところでは普通、樹液に集まっているものが多い。

6. *Lethe sicelis* HEWITSON ヒカゲチョウ

1975-VI-10 来日 (K. K.)

前種と同じく林縁、林間等の日陰を好み、木漏れや薄敷した果実等に集まるものどみかけるが、前種よりはるかに数は少ない。

7. *Mycalesis francisca* CRAMER コジャノメ

1973-V-27 来日 (T. ERDO)

1975-V-15 城崎ロープウェイ上終点付近 (K. K.)

1975-V-27 来日 (K. K.)

山すそから中腹に少なくない。林の中およびその近くにみられ、日陰の葉上などに止まっているものを多くみかける。

他の科の蝶に比較して、この科の蝶の記録は少なく、当然発見されるべきはずの *Mycalesis gotama* MOORE セメシノメの記録がない。また、*Neope goschkeyitschii* MÉNÉTRIÈS サトキマダラヒカゲの標本の確認もできていない。今後の詳しい調査を期待したい。

V まとめと今後の方向

I	HESPERIIDAE	セセリチョウ科	7 (7)
II	PAPILIONIDAE	アゲハチョウ科	9 (10)
III	PIERIDAE	シロチョウ科	6 (6)
IV	LYCAENIDAE	シジミチョウ科	10 (10)
V	CURETIDAE	ウラギンシジミ科	1 (1)
VI	DANAIDAE	マダラチョウ科	1 (1)
VII	LIBYTHEIDAE	テングチョウ科	1 (1)
VIII	NYPHALIDAE	タテハチョウ科	17 (18)
IX	SATYRIDAE	ジャノメチョウ科	7 (7)
TOTAL			59 (61)

来日岳における蝶類の科毎の既知種類数

( )内は目撃・毎朝記録を含む数

来日岳で現在までに記録された種は以上の通りであるが、調査した季節の偏り（特に夏から秋にかけての記録が少ない）や、コースの偏り（竹野町側からの調査を行ってない）などから、またまたこの地域からの種の数が増加するものと考えられる。また、せっかくな

ながら、私の不勉強から食草、食樹等の調査が少しも  
 されておらず、深く反響している。その面も含めた総  
 的な調査をしなければならぬと思う。今後は、1976年  
 に出された「妙見・蘇武・三川および神鍋周辺の蝶類」(遠藤  
 二、自然保護協会但馬支部研究紀要、vol. 2(3))とこの采  
 の蝶類の目録の中間を埋める意味で大崩山、矢次山へ  
 調査にも目がむけられることを望む。

採日岳にも中腰に船舶人の無縁中継所と称する大きな  
 物があったり、采日部落からは立派な林道が刻一刻と  
 上めざしてのびつたり、蝶達の環境の変化はとまる  
 ころを知らないのが現実である。この目録がまったく  
 過去の記録とならないことを祈りずにはいられない。

## IRATSUMEの原稿を募集します!!

IRATSUME 第2号はタイプ印刷で

来春(1978年4月)刊行の予定です

どなたでも結構、下記要領で御投稿下さい

### 投 稿 規 定

1. テーマは特に設定しない。採集報告、研究報告、エッセイ等昆虫に限らず、生きもの、自然に関するものは認める。また但馬外についてのものも認める。
2. 原稿は原則としてA4版横書400字詰め原稿用紙とする。
3. 図版、写真等は原則として投稿者による。また本文中の挿入場所を指定のこと。
4. 締切りは1977年12月末日までとする。
5. 原稿の送り先は最寄りの連絡人へ(裏表紙参照)

## 執筆者の住所(ABC順)

足立 義弘

遠藤 知二

石田 遠也

木下 賢司

高橋 匡

谷角 素彦

## 編集後記

よらやくにして、但馬むしの会誌「IRATSUME」創刊  
なつたかと思ふとホッとする。むろん、いわけ勝負は二  
れがり、である。

根っからの「蝶屋」さん、「虫屋」さんには、創刊号は  
それほど面白いものではないかも知れない。具体的な報  
告としては木下さんの「栗田岳の蝶類」だけで、後ほむ  
しの名前すら大してでてこない。けれど、われわれの旗  
上げとしてみれば、これで仕方がなかったのだ。要する  
にまだ何にもない、これから突き上げていくしかないの  
だから、今後を期待してもういたい。

まだ執筆願いたい人も何人かいたのだけれど、今回は  
都合で載せられなかった。二れりの人々には次号から執  
筆していただければ、と思っている。

次号を旨指して今シーズンは大いにかんぼろう!

---

IRATSUME 第1号  
1977年4月10日発行  
但馬むしの会  
(遠藤 知二・責任編集)

---

連絡人

遠藤 知二	063	札幌市
木下 賢司	668	豊岡市
谷角 素彦	662	西宮市